

郷土博物館・文学館だより



『賀茂社秘訣』(國學院大學蔵)



四大人画像
(國學院大學蔵)

当館では、3月22日まで、「神饌－賀茂真淵とそなえもの」展を開催しています。

開催中!

企画展

「神饌－賀茂真淵とそなえもの－」展

今回の展示では、まず賀茂真淵の誕生から学問の師・荷田春満との出会い、そして江戸に来てからの彼の研究成果を紹介しながら、彼の生涯について振り返ります。

続いて、賀茂真淵の業績の中でも『古器考』を取り上げ、有職故実の観点から、彼の「もの」のとらえ方について紹介します。さらに真淵が取りあげた祭具では、どのような食べ物が神饌としてそなえられているかを、賀茂社などの例で提示しています。

また、神社だけでなく民俗例についても「年中行事とそなえもの」として展示していますので、是非ご覧下さい。



展示解説風景

渋谷の大名屋敷と庭園

江戸時代、渋谷にはいくつかの大名屋敷がありましたが、渋谷は江戸のはずれに位置していたため、そのほとんどが下屋敷でした。上屋敷が大名やその正室などが居住する屋敷なのに対し、下屋敷は上屋敷などの火事の際の避難場所や別荘などとして利用され、庭園を備えたものも多くありました。渋谷の大名下屋敷でも、その起伏に富んだ地形と湧水を利用した庭園が造られました。その一部を紹介しましょう。

渋谷区役所の北東、国立代々木競技場の付近には、かつて岸和田藩岡部家の下屋敷がありました。ここの庭は「通明観」と呼ばれ、『江戸名所図会』に「風景他に越え四時共に美観たり」と紹介されています。明治時代になり、この付近が代々木練兵場の一部になっても、池だけが残され「岡部が池」と呼ばれていましたが、昭和の初めにはそれも消滅してしまいました。

岡部家の屋敷からみて、渋谷川の谷をはさんだ反対側の台地上、現在の国連大学がある付近には、淀藩稲葉家の下屋敷がありました。この屋敷は、明暦3年(1657)、春日局の孫にあたる稲葉正則の代に成立したものです。屋敷の庭園の池は、その形が楽器の琵琶に似ていることから、「琵琶池」と呼ばれ、そこを望む場所に建っていた建物には、奈良の三笠山にちなんだ「三笠閣」という名前がついていました。「三笠閣」は、もともと幕府の二条城にあったものを春日局が家光から賜ったという由緒ある建物で、明治時代までこの場所にありました。

稲葉家の屋敷の北、現在の表参道の周辺には、広島藩浅野家の下屋敷が広がっていました。こ

こには曲線を描いた細長い池があり、乗馬の際に馬に付ける鎧(あぶみ)の形に似ていることから「鎧の池」と呼ばれ、広大な敷地の中には、「松のお茶屋」「紅葉のお茶屋」などの名前がついた建物も点在していました。池は明治維新後も残っていましたが、大正時代の表参道建設の際に埋められてしまいました。

また渋谷区の南、現在の日赤医療センター付近には、佐倉藩堀田家の下屋敷があり、この広大な敷地の中にあつた庭園は「広尾山荘」といわれていました。天保3年(1832)に、ここを訪れた連歌師坂昌成は、「広尾山荘の記」を書き、「かみなる池の樋口あけたれば、水すみやかに落たきりて、此世の外の心地せり」と、その美しさを書き残しています。

今ではこうした庭園のあつたことを示すものはほとんど残っていませんが、神宮前五丁目にある住宅展示場(かつての東京都職員共済組合青山病院の敷地)には、稲葉家下屋敷にあつた琵琶池の一部が残っており、わずかに昔の面影をしのばせています。



稲葉家下屋敷にあつた琵琶池

唱歌と童謡とわらべうた

1900年にエレン・ケイが『児童の世紀』を発表すると、子どもの存在は「庇護されるべきもの」となります。日本でもこの影響は大きく、情操教育が重視されるようになり、子どもの歌の世界にも新たな動きがでてきました。少なくとも、そこには唱歌、童謡、わらべうたという三つのジャンルがありました。

唱歌は狭義には文部省唱歌のことをいい、「かたいまじめな、広い意味で教育的な目的で作られた歌」（金田一春彦ほか『日本の唱歌』上 明治篇 講談社文庫 1977）で、小学校の唱歌の授業で子どもたちに歌われました。

童謡は、子どものための創作歌謡をいいます。『赤い鳥』や『金の船』などの児童雑誌には、それぞれに北原白秋や野口雨情といった童謡詩人がいました。雑誌にはこれらの詩に曲がついた譜面が掲載され、さらにレコードで販売されて広く知られることになりました。

わらべうたは、口頭により各地で伝承されてきた子どもの歌です。民俗学者の柳田國男は「蝸牛考」や「ツーボロカイボロといふ童唄」などの論文の中で、こどもが何気なく歌う言葉の中に日本文化の古層があることを指摘しています。

こうした動きの中、唱歌と童謡の詩人は、それぞれの立場を主張しながら、さらに大きく発展してゆきました。文部省唱歌に対し、特に批判的な発言をしたのは北原白秋です。

白秋は「新興童謡と児童自由詩」（『岩波講座

日本文学』14 1932）の中で、唱歌と童謡の違いについて「新しい日本の童謡は、根本を在来の日本の童謡に置く。日本風土、伝統、童心を忘れた小学唱歌との相違はここにあるのである。従ってまた、単に芸術的唱歌といふ見地のみより、新童謡の語義を定めやうとする人々に、私は伍みせぬ。（中略）日本大正期に於ける芸術童謡の提供は、初めて日本の諸詩人たちによって自覚され、共力された一つの大なる新運動であった。此の新運動の精神としたところは何か。意図したところは何か。祖国愛である。日本童謡の伝統の開展である。而して、かの非芸術であり功利的である小学唱歌の排撃である。」と述べています。

白秋の批判は、唱歌には、子どもではなく大人の心が歌われていることにありました。渋谷に暮らした高野辰之が作詞した唱歌「故郷」には「こころざしを果たしていつの日か帰らん」とありますが、ここにも大人の心が表れているといえるかもしれません。

白秋の主張の是非はともかくとして、戦前の日本には、子どもの心をこれほどまでに汲み取ろうとした大人たちがいたということは、あまり知られていないのではないのでしょうか。



尋常小学校の唱歌の授業で用いられた教科書『尋常小学唱歌』

収蔵資料紹介

「テラコッタの忠犬ハチ公像」



今年三月八日は、ハチ公の八十回目の命日です。そこで、今回はハチ公関係の資料を紹介いたします。

当館には、渋谷駅前の「忠犬ハチ公像」を小さくしたような、高さ三〇センチ程のテラコッタ(素焼き)の像があります。この像は、製作後ほとんどが破棄されたため、現存を確認できるのは五体のみで、「幻のハチ公像」ともいえる像です。

ハチ公は、昭和7年(一九三二)新聞で紹介されると、翌日から大変な人気となったといわれ、昭和9年には渋谷駅前に銅像が建設されました。この年、「忠犬ハチ公銅像頒布会」という会も設立されました。この会は、小型のハチ公像販売のために作られた会で、渋谷駅のハチ公像を制作した安藤照に像の原型制作を依頼しました。像販売の理由として安藤

は、芸術普及のため、あるいは学童の美術教育に有用だと説明し、協力させました。しかし、実はこの会の目的は、陶製で安価なハチ公像を作り、利益を得ようとするものでした。

テラコッタのハチ公像が完成し、販売の話が具体化する中で、安藤はそのことを知りました。安藤は激怒し、頒布会に對して、これまでかかった費用の全てを自分が支払う代わりに、全てのテラコッタ像を引き渡すように要求し、販売の話は白紙にするご通告しました。

販売予定であった像は安藤に送られ、ほとんど処分され、わずかに残った像も戦災により数体しか残りませんでした。本資料は、販売に向け制作された試作品の一つで、当時安藤との会食に同席した顧問弁護士息女が、安藤から記念にもらった像だといわれています。

【開催中の展示】

◆企画展「神饌一賀茂真淵とそなえもの」展

平成27年3月22日(日)まで

【開催予定の展示】

◆企画展「第15回渋谷現代短歌優秀作品展」

平成27年4月1日(水)～4月12日(日)

*第15回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

◆企画展「新収蔵資料展」

平成27年4月18日(土)～5月31日(日)

*平成26年度に新たに収蔵した資料を展示します。

白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIRUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆11:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆一般:100円(80円) 小・中学生:50円(40円)

※()内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方 付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.28
平成27年3月10日発行